

大陸（満州）

満州国境守備隊

終戦からの脱出行（一）

神奈川県 大矢 東

日本には徴兵制度があり、この徴兵検査は満二十歳になると行われていたが、太平洋戦争たけなわになり、年齢が一年繰り上げられ実施されることとなった。

私は昭和十九（一九四四）年に検査を受け見事に甲種合格となり、日本男児と生まれてこれ以上の喜びはなく、そして軍人としてお国のために尽くすことができ、胸を張って歩くことができると思った。

検査の年に兄の戦死の通知が届き、二カ月も経たないうちに、自分にも徴兵令状が来た。大日本帝国軍人として立派に義務を果たすと決意した。しかし両親は三人の甲種合格の男の子を育て上げ、お国のために尽くしてくれると、喜びの反面は泣いていたであろう。

徴兵令状が来て出征まで十五日しかなく、満州第一国境守備第四地区派遣、第七七七部隊砲兵第三中隊部隊に入隊することになった。

一期の初年兵教育六カ月もあっという間に終わり、士官候補生に進むことにしたが、教育が終わる一カ月前に急遽原隊復帰が命じられ、全員それぞれ部隊に帰る。その時、中隊は永田隊に変わっていた。

昭和二十年になると、部隊は満州第三六九九部隊となった。そして、再度五月には大移動があり、独立混成第三百二十二旅団「奮戦」第三七九二部隊となりソ満国境の守備についた。

昭和二十年八月九日、当番室の戸がドンドンドンと叩かれる音で目が覚めた。夜中の二時十分、何事かと飛び起きる。戸を明けると砲兵第三中隊中隊長永田悦雄殿が、武装して凜々しい姿で立っている。「大矢、戦争だ。出動甲、天幕と水筒だけ用意して集合だ」「はい！」と大きな声を出すと、隊長はいつもと違って小声で「大矢、お茶盃だ。もう二度と会うことはなからう。元気で戦つてくれ」と言つて茶碗を合わせ、廊下を音を立てぬように摺り足で行つてしまった。

その間二分ぐらいいだった。たちまち営門からラッパの音が聞こえて来た。闇夜に音は小さく不気味に響いた。私は早く準備を終え、内務番につくと同時に素早く砲廠に出動した。

すぐに、砲が砲廠から出された。闇の中で人数の確認もままならないほどののに、みな素早い。御者は早くも砲の出るのを待っている。馬もよく訓練されていて鳴かず、静かにして素早い。砲を六頭引きで牽引して砲廠前を出す。馬の張り切りようには感激する。「砲手、上乘」の合図が出て砲車の座席に飛び乗る。

三角山の途中まで行くと空が白んできた。飛び降りて砲の後を押す。が、百メートルも行けば息が切れる。馬の力はもの凄い。こんな状態が一時間ほど続く。先の一門は、無事陣地中に据えつけることができた。しかし後の砲一門が崖に落ちた。抵抗器から砲身を外せない。ネジを緩めて空気を抜くと、すぐに砲身がするりと抜けた。縄を砲身につけて八人で、私の掛け声であつという間に引き上げ陣地に据えつけた。

太陽が出る頃、雲が邪魔して日の出は見られない。六時頃だろうか、全員集合命令。集合してみ

ると北村曹長人事係が「名前を呼ばれた者は前に出て整列するように」と言われ、順次名前が読み上げられた。

北村曹長から「今呼ばれた者三十七人は、橋本少尉のもと郭亮・勾玉の歩兵の部隊に所属して敵と交戦し、たとえ五分でも十分でも敵をくい止めること。我々は後方に下がって待ち受けての交戦をする。戦死は覚悟の上で戦ってくれ。あとは橋本小隊長の指示に従え」とのこと。その瞬間、戦死か、と思った。

小隊長は前に出ている。私は「四人を指揮して砲廠へ行き、迫撃砲を二門持って郭亮へ行け」との命令を受け坂を駆け降りて行く。

かんかん照りの晴天は暑く、真夏の日差しはこのほか強い。水筒の水を少しずつ飲んで進み、休むことなく砲廠に着く。初めは軽いと思っていた砲身が、だんだん背にめり込むように重く感じる。足はそう重くない。交替して郭亮まで行く。

途中、大きな握り飯が一人に一個あて届いた。駆

け足で持って来てくれたらしい。すでに九時を回っていた。水を飲み飲み急いで食べる。塩だけの握り飯だったが旨かった。

歩兵隊の中だ。営門には誰もいない。疲れていても休めず、ただひたすら迫撃砲を担いで郭亮目指して坂道ばかりを歩いた。すると陣地から見たことのない兵隊が応援に来て持ってくれた。郭亮の陣地の入り口までたどり着くと、陣地の中は大分騒々しい。そこでは命令もなく、いつしか襟章をお互いに手で取り合っていた。すると、敵の砲弾が時々飛んで来て、陣地の一メートルもあるコンクリートがガタガタと崩れ始めた。歩兵の伍長が、「郭亮は危ない！早く勾玉陣地に移れ」と命令する。さすが歩兵。どこからも敵に見られないような道を覚えていて、勾玉陣地に移動できた。

夕方、古兵らしき兵隊が「こんな暑い真夏に大演習なんか、馬鹿も休み休みしろ」と言った。まだ小銃や機関銃の音もそうしていない。しかし勾

玉陣地に着くと、ソ連と満州の国境の綏芬河がすぐ傍らに見え、いつ架けたのか橋が架かっていた。上から見ると水深は自動車の半分ぐらいで、川の中を通って満州領内に自動車が入って来る。東寧方面にも何百か何千か次々と入って来る。女も大勢乗っている。軍楽隊もいるのだろうか、楽器等も荷台にあるのが見える。小銃の音もなく、陣地の回りには敵は近寄っていないらしい。ちょっと複雑な気持ちで指令を待つ。

夕方になって、ソ連軍は「日本軍が降伏すれば全面的に戦争を中止する。ただし、二十四時間のうちに降伏しなければ攻撃する」というものだった。しかし、一同は、情報を信用せず、敵の陰謀だ、策略だと関知をしない。こんななかで陣地では乾パンが一袋ずつ配給された。水分が十分になるので口の中がばさばさで思うように食べられず、一日一袋の配給もほとんど残ってしまふ。

九日の早朝から飛行機が飛来し、東寧の街の中心部あたりが爆撃されたらしく黒煙がもくもくと

上がっているのが見えた。

外はもう暗くなっていた。月は昇っていないし、時刻も分からぬ。土屋軍曹が来て「炊事場へ行って飯を貰って来い」という。行ってみると「もう飯は終わった。何もない」非常用乾パンの入れ物の回りに少しばかりの飯粒がついている。一粒も残さず取っても一握りにもならない。それでもそれを貰って二人で食べた。これが最後の米の飯になった。連絡も何もかもなく不安であった。

八月十日、夜明けと同時に銃声が聞こえて来た。私達は陣地の入り口右側の戦闘の配置につく。前は谷でそこに軍犬小屋があり、向こう側には鳩舎がある。九時頃になって敵は鳩舎の前に来た。かなりの急斜面を腰だめして、機関銃(カービン銃)をパラパラと撃ちながら登って来た。三十メートル以内まで近寄せて狙撃する。次から次と登って来るが百発百中だ。二時間も経つただろうか。ようやくやく銃声も収まり敵も登って来なくなった。こ

の日、勾玉平の方角は歩兵隊が物凄い激戦で戦死者が出たようだった。

ソ連軍が満州国境を越え満州領内に侵入を開始した。「一 黒河、二 虎頭、三 綏芬河、四 郭亮東寧、五 図們の順だ」と土屋軍曹から私に連絡が入る。敵は、重要地点としてやって来た。歩兵隊の一人が本部にきて「ソ連は物凄い大軍で満州領内に突入して来た。警戒するように」とのことである。

戦争が始まって二日目か、東寧方面から陣地に婦女子が入って来た。聞くとところによると、看護婦四人、上官の夫人、子供、開拓団の少年隊等で合計百人以上の人数が郭亮から勾玉に移って来たのだ。一般の人が兵隊の足手まといになつては申し訳ない。お国のために自決を、と申し出たと土屋軍曹が言われた。

砲兵はたった三十七人であるのに、どこにいるのか分からない。時々土屋軍曹が連絡に来るだけ。

たまに同年兵や古年兵に顔を合わせる。明るくなると早朝より壕やトーチカに配置につく。

トーチカ左側前方に敵が上がって来た。勾玉平に登って来た敵は十人ぐらいいたが、小銃で何発撃ったか分からない、ついに人差指が腫れて動かなくなった。引き金に紐を結わいて撃つことにした。やつと敵が登って来なくなった。気がつく、人差指が腫れて痛みが走り動かなくなっていた。触ってみたら熱を持っている。再度登って来る敵に止むを得ず引き金に一尺ばかりの紐を括りつけて撃った。

十日の晩は、静かな月夜で、十七日月か。遠くには機関銃の光がピカピカと見え、音がする。涼しい晩である。すると、小鳥の声がした。ピッピッピ、パイパイパイと月夜に鳴きながら飛んでいるのかと思いい目を凝らしたが、全く見えない。伝令が来て「敵は、小鳥の声で合図をしているので気をつける。今晚は退却して陣地に入るように」とのこと、静かに陣地に退却する。

戦争が始まって四日目、朝から敵は大軍で勾玉陣地を囲んでいるようだ。歩兵隊の営門からソ連軍がぞろぞろ入って来る。勾玉平まで近寄って来る。肉眼でもよく見える。敵の進行が意外に早く、もはや迫撃砲を運ぶことができなくなってしまった。十五発くらいは運んだ。急いで撃たなければと何発も撃った。

しかし、敵は退かず迫撃陣地の土囊前三十メートルほどの所まで近寄って来た。横から歩兵隊が援護しても駄目だった。

突然、吠の中の米が燃え出し、喉が痛み、むせて息ができないほどになった。そのうちに機関銃の弾と米が真っ赤な塊となって飛び出し、その一つが佐藤古年兵の胸に入った。入口にいた兵が医务室に連れて行った。

八月十二日、十時頃に再度ソ連軍が登って来た。陣地に登ると、弾が破裂して散らばり、足の踏み場もない。晴天で暑いが、山頂だけは神の助けか

風が涼しい。今日はいやに静かだ。薄暗くなると古年兵が来て自分と替われと命令する。すぐに一線歩哨となった。交替して任務につくと間もなく、敵の迫撃砲弾が入口の一番近くに落ち、古年兵は直撃を受けて吹っ飛んでしまった。再度敵は迫撃砲を撃ち込んで来た。「退却せよ」の伝令が入った。自分と替わった兵は戦死として早くも名前が消されていった。

陣地の入口前には五メートルほどの谷があり、向かいの谷の上の鳩舎横にわずかな谷間がある。そこに犬舎があり、犬の鳴き声も敵の目標になるからと、銃殺が命じられた。

犬舎の中にいた一頭の軍馬も銃殺した。とにかく敵が接近しているのでいつ、どこから撃たれるか分からない。先に見つけた方が勝ち。目も耳も全神経を集中させて、一時たりとも気を緩めることはできない。そして行動は敏速でなければならぬ。日没になってようやく敵が後退した。

土屋軍曹が呼びに来た「展望台の前に敵が来た、急いで迎え撃て」と。展望台といっても、鉄の棒の階段に足掛かりのできているだけの物だ。自分の前に狙撃していたMの鉄兜に弾が当たった。弾は鉄兜を突き抜け、兜の中で三回も回って背筋を伝って落ち、腰のバンドで止まった。展望台から転げるようにして落ちて来たMを、たまたま下にいた自分が受け止めた。

「熱い、熱い」という。ようやく腰から弾を出した。まだ手で触ることもできないぐらいの熱さだ。交替して小銃で狙撃する。かなり長い時間の撃ち合いだ。太陽が三角山に隠れる頃になって、ようやく敵はいなくなった。

壕の入口に集合することになったが、集まったのは四十人ぐらいだった。中隊長が一番高い所に上がって「今晚は最後の激戦である。合図は『山』『川』『川』と返事がなければ即、銃で撃て。そして、慰問袋がある。いくつでも持って行け。ビールも酒もある。飲める者は持って陣地の上に乗

がり、思う存分交戦してくれ」と力強い命令だった。歩兵壕、俗に蛸壺が、五メートルぐらい置きにいくつも掘ってある。暗いので空いている所を探し入った。

まずビールを一本飲んだ。慰問袋は朝鮮の物だ。全部が古い物で三年以上経っているのではないかと思われる。どれを取っても食べられた物ではない。その上唐辛子で辛くて食べられない。全部捨てた。すると誰かが這いずるようにして来た。

「山」「川」を確認した。岩崎古年兵だった。特に話すこともない。「自分は九州熊本の出身だ」「自分は神奈川です」「そうか、まあ酒でも一緒に」一升壇をラッパ飲みして、二人で半分ほど飲んでしまった。すると喉が渴いて来た。ビールを半分ずつ飲んで凄い。酔っていつか眠ってしまったようだ。いつかあぐらを組んで、肩に掛けた小銃を両手で持って腕組みをし、蛸壺の中で寝ていた。

目が覚めてみると、岩崎古年兵はいつの間にか

いなかった。そしてなんと周りの土が乾いて、股の辺りまで崩れ落ち埋まっているではないか。昨晩はかなりの敵が来たのか。いや、そんなことはない。目覚めない訳はない。頭の中が混乱するばかりだ。とにかく立つことができない。小便もしたくないし、うっかり立てば狙撃されるし、としばらく思索した。

真夏の太陽は、遠慮なく照りつけ暑い。立ち上がって見ることができないので、耳をじつと澄まして見るだけ、たまに立て膝のままそつと辺りを見回す。いざという時に備えて、少しずつ土を掻き出し中で動けるようにした。水がない。酒は五合ばかりあるが、飲めば余計喉が渇く。喉の入口まで入れるだけで吐きだした。夕方になって銃声が途切れたので、這って陣地に戻った。

二、三日のずれはあったが、ほとんどの兵隊が蕁麻疹にかかった。体のあちこちが痒い。痒い所が変わっては体中が火照る。寝て起きるとどこ

なく痒くなる。我慢する以外に方法がない。早くも二週間が経ったと思うころ「何日も風呂に入らずにいるせいかわ、どうも虱が沸いたらしい」と小声で話しているのが聞こえた。むずむずと動いているようなのは虱かなと思った。

二日前頃からか、銃声も機関銃の音も少なくなつた。一日に数えるほど。二回か三回か。機関銃の音など一回もない。考えてみると砲に至っては四日間も来ていない。あまりの静けさを不気味に思う。いつものようにして敵が出て来るかと、不気味さが増す。油断はできない。

夜中に本部の経理室を焼きに行ったという歩兵の古年兵にあった。「経理室の中から軍票や日本金を持って火をつけて来た。引出しにぎっちりあった」と話しながらトーチカで何人かで分け合つた。この戦争の最中、どこでどのようにその金を使うのか、と思ひながら聞いていた。敵に使われないようにとの配慮から火をつけて燃やしたらしい。

ソ連兵は夜目は弱いらしい。砲に四人ぐらいで立っているが、その間を抜けて砲の陰から撃針を抜いて来たが分からなかったらしい。翌日はその砲を捨てて行ってしまったそうだ。

日本人もかなり戦死したが、ソ連兵も大勢死んでいる。ソ連の戦死者は全員入れ墨がある。顔や手にまで入れ墨がしてある。重犯罪者を前線に出して弾除けにしているとか。隠せない所に入れ墨は罪が重いそうだ。靴はひどい。三十センチ四方ぐらいの牛革のまわりに紐をくるりと通して、ぐつと締めておくだけの代物だ。

武器はいい物を持っていた。狙撃銃は眼鏡がついていて、百発百中できそうな素晴らしい物だ。ソ連の持ち物を盗みに行つて手榴弾で殺されたり、負傷したりした者が出て注意された。狙撃銃をだいぶ分捕つて来たが、長くて重い。日本の三八式よりはるかに重い。

いつのことか日にちは分からないが、「日本は

負けたらしい」というような話を耳にするようになった。軍使が五人白旗を上げ勾玉に登つて来たが、途中で狙撃したとか。

そのような時、大沼先輩に会えた。「どうも負けたいらしい。久保や大沢達は二、三人で勾玉を脱出した」と言った。でも、日本が負ける訳がない。と思い込んでいたし、誰も負けたとは言わない。大日本帝国軍人はそう簡単にソ連軍などに負けたりしない。互いにそう思つて任務につく。

戦争がまた激しくなつて一週間ぐらい経つた頃だろう。同年兵の山崎が「土屋軍曹が戦死した」と教えてくれた。驚きのあまり返事もできなかった。激戦の続く中、土屋軍曹は部下を思つての張り切り過ぎではなかったか。まだ軍曹はいられると思つていたのだが、敵に陣地を囲まれてしまい、さらに勾玉も包囲されてしまったので出るに出来ない状態だ。暗くなるのを待つて戦鬪をいかにしたら良いか考えねばならぬ。

いよいよ陣地内には水がなくなつた。疲れ果て

て、兵隊は動くことすらできなくなってしまうた。何とかしなければと見回すと陣地の中ほどの壁に水が滲んでいる。この水を何とかして採りたいものだと思い、子供の頃の折り紙で紙コップを作ったことを思い出し、陣地の隅に破れた紙で折り紙コップを作った。水の滲んでいる壁に帯剣で斜めに溝を三本作るとコップには見事に水が溜り、三十分程で水が飲めた。旨かった。生気が戻ったようだ。元気が取り戻せたようだ。

暗闇の中、伝令が入った。

「陣地は完全に包囲されている。脱出するしかない。今晚三班に分かれ、三回に敵の隙を見て出る」という。また駒井少佐より「我が勾玉陣地の悲惨な状況を後方部隊に告げよ。告げ得たものに対しては、たとえそれが一兵卒であっても金鵄勲章を授与する」という命令が出たと。

各自小銃弾六十一発、手榴弾二発、五寸釘一本を持ち、小銃弾一発と五寸釘は最後の自決用に所

持する。以上が脱出に際しての注意事項であった。脱出の時間は一番は十時、二番は十一時、三番は十二時で、順番がくるまで休んで待つことになった。

うとうとしていると再び伝令が来た。「出動か」と起きると、小声で「敵は物凄く大勢で警戒している。十二時の脱出はできない。しばらく待て」と、そのまま陣地内で待つ。

昭和二十年八月二十四日午前三時半、脱出の伝令が来た。勾玉陣地の壕から出る。指揮官から命令が下った。「静かに聞け、第一、第二は無事に脱出に成功した。我々はこれで全員約三十人のようだ、無事に脱出できるように。今からばらばらになる」と。たちまち空が白んできて肉眼でも見えるようになってきた。

勾玉陣地を脱出して、茅の中にじっと息を殺して動かずに伏せている。物凄い轟音、銃撃が激しい。空を見上げると、ちょうど太陽が昇り始めて

いた。飛び交う銃弾が七色に見えた。弾の飛ぶ速度、方向によって、また弾に当たる度に色が異なる。そして弾が空気を切る音も凄い。

ふと横を見ると、五メートル横にかなり深い溝がある。その先に擲弾筒一門に二人の敵がいる。何か言いながら我々のいる叢の方に打ち込んでいく。敵を狙撃することはできるが何しろ大勢の敵である。今は我慢強く敵の去るのを待つことだ。

真夏の晴天の太陽は、遠慮なく照りつける。敵も弾を撃たなくなった。すると、戦友もみんな少しずつ体を動かしたり手真似をしたりして、戦友同志で合図をするようになった。寝そべったまま勾玉陣地を見上げると、敵が何百人も登って来て、一斉に喚声を上げ始めた。悔しくて、どう考えても残念でたまらない。

敵はしばらくして勾玉陣地の頂上に集合したよう、銃口を空に向け、一斉に打つ。日本の祝砲と同じかも知れない。昼頃には銃も砲も撃たなくなり、敵はいなくなった。

食べるものも水もない。草の陰が少しは目を除け何分か助かる。はじめは十五人ほどいたが、いよいよ叢から抜け出ようとした時には六人になっていた。北に向かつて、敵が二人位マーチョに乗って通った。時々マーチョが日本の衣料を積んで通って行く。薄暗くなって来て、ぽつぽつ抜け出す準備に入る。

辺りが見えなくなった。静かだ。集まって作戦を練る。出て五メートルほど行くと、歩兵隊の兵舎裏のすぐ側にある溝に入る。そして叢の中を下り、途中で出て山に入り、斜面から砲兵隊兵舎に入ることにした。無事に作戦通りに成功した。

まず被服庫に入る。自分は中隊の当番室に入っていた。出た時のまま手つかずになっていた。急いで全部着替えて出る。

弾薬庫を出て三角山に行く。坂を登って行くと歩兵隊兵舎に火が見えた。急いで土手に上がり、小楯の株の密集の中に入る。見る見るうちに赤々

とした火は中隊兵舎の一棟を包み燃え上がった。じつと樅株の密集の中に身を隠しているしかない。燃え尽きるまでは動けない。

夜中にぼつぼつと三角山に登って行った。砲兵隊の陣地に着くと朝だった。もう一歩も歩けないほどで、登りはきつい。しばらくすると人影が二人、三人見える。どうも日本兵らしいが、まだ気は許せない。

馬廠山に兵隊がいるのを隠れたまま見定めてから、軍曹が手を振って見せる。先方も手を振る。

「我が軍だ」と隠れていた全員が出て、合図が確認できて山を降りて行く。

壕の中には大勢いた。歩兵の黒田中隊長と砲兵の高橋中隊長が出迎えてくれた。開口一番「飯は食べていないだろう」と、握り飯を二個貰って食べる。何日ぶりだろう、旨かった。

【解説】

体験記執筆者は、満州第一国境守備・第四地

区派遣、第七七七部隊砲兵第三中隊佃隊に入隊する。

その後、この東寧の第一国境守備隊は軍隊区分で東寧旅団に改編され、これを基幹に第二、第十国境守備隊をもつて、昭和二十年五月、独立混成第三百三十二旅団を編成、七月に編成を完結、第三軍の隷下となった。同旅団は「奮戦」第三七九二部隊と呼称される。

独立混成第三百三十二旅団の所属部隊は、独立歩兵第七八三〇七八六大隊の四個大隊を基幹とし、旅団挺進大隊、砲兵隊、工兵隊、通信隊、輜重隊が直属部隊であった。基幹部隊の前身は、国境守備隊であったため、その素質、戦力は当時動員された部隊としては優秀であったと言われる。

また、旅団は第一二八師団の指揮下に入り、師団の左翼正面を担当し、一部は東寧地区の勝鬨陣地と勾玉陣地に配され、師団正面には、東寧重砲兵連隊等が残置されていた。

執筆者は、この部隊に属してソ満国境の守備に着いていたが、八月九日、ソ連軍の侵攻と共に、所属部隊の脱出行を共にし、永い脱出行の末に、遂に帰国を果たしている。この体験記は、困苦に充ちた脱出行の記録（その一）である。

八月九日、ソ連軍の侵攻により、旅団は東寧支隊

（独歩七八三、七八六大隊、旅団砲兵隊と挺進大隊の一部）を残置し、主力は同夜に東寧を出発、途中、ソ連軍の攻撃を受けつつも十四日には大喚廠に後退し、師団所属の歩兵第二八二連隊の配属を受け、師団主力の左側背などの掩護任務に着いた。

東寧支隊は、日ソ開戦と共に三角山、勾玉、勝鬨陣地において歩兵、砲兵協力した頑強に抵抗を続行し、八月十五日の玉音放送後も頑強に抵抗を継続したと言われる。

独立歩兵第七八七大隊は郭亮船口、勾玉陣地で玉碎、独立歩兵第七八三大隊は勝鬨陣地において八月下旬まで抵抗し、参謀の停戦命令が確認されるまで死守したとの記録がある。

筆者は、このようなソ連侵攻に巻き込まれ、今回の記録では、勾玉陣地よりの脱出行を開始するところから始まるが、筆者は平成十六年十一月、座間市において「奇跡生還碑」を建立して、恒久平和を祈念している。その趣意書から見ると、脱出行の全容が伺える。

『八月二十四日に生き残った兵士は、勾玉陣地を脱出、後方の援軍を求めて撤退するも遂に六人となり、十一月三日に現地での越冬を決める。酷寒零下三〇度の満州の密林に穴を掘り、夏服装、わずかに得られた食糧と野草トウモロコシ、鼠、蛇、蝮、蛙などを食べ、最後は一日玉蜀黍一五〇粒で飢えをしのいだ。この間幾度も敵の襲撃を受け、自決で尊い戦友を失い、残った者は遂に四

人となった。昭和二十一年五月、八路軍に掴まり、ここではじめて終戦を知った』という。そして祖国日本に帰還できたのは同年九月だった。

私の歩んだ道程

北海道 菅野 要治

私は大正十（一九二一）年、東北の静かな村に生まれた。両親は健在だったが、これと言う定職もなく、その日暮らしの生活だった。父の仕事は天気の良い日は、山に行つて百合や芋を掘り、雨の日は河へ行つて魚を獲り、それを母が街に行つて売ってくる。物々交換するのかわらないが何とか全部捌いてくる。当時は田畑で農薬を使わないのでドジョウが沢山獲れた。

こんな生活なので獲れた日はいいが獲れない日もあり、その獲れ方によつてその日その日の生活が変わる。米の日もあれば芋の日もある。どちらかと言うと芋の日が多かった。それでも私共は何も言わない。子供は六人だが家にいるのは両親と私と妹の四人だけだった。私の上には長男、長女、次男の三人いるが、小学校卒業は一人もいない。